

## 一問一答質問項目表

### 1. 教育問題について

- ① 学力テスト中心の学校運営に様々な弊害が生じている。平均点競争に走らされている教育現場の実態をどう認識しているのか伺う。(教育長)
- ② 松江市は、松江市総合計画の「学力向上対策事業」の目標指標に「全国学力調査における全国平均値以上の調査項目数(教科)の割合を100%にする」ことを目標値に設定している。目標値の設定によって、点数を上げることが目的化する由々しき事態が生じていると考えるが、所見を伺う。(教育長)
- ③ 松江市は、学力テストの平均正答率の学校別結果を公表している。結果公表によって、子どもや保護者、教員が傷ついているが、その実態をどう認識しているのか伺う。(教育長)
- ④ 点数を上げるために過去のテスト問題、類似問題、ドリルなどを実施する「学力テスト対策」が頻繁に行われている。これでは公正なテストとは言えず、テスト結果に一喜一憂すべきではないと考えるが、所見を伺う。(教育長)
- ⑤ 教員の長時間労働の解消の点でも、学力テストの見直しは喫緊の課題と考える。一人ひとりの子どもに教師の目が行き届き、学習の遅れがちな子どもにも丁寧に対応できるようにし、多忙化を解消して教師が準備に十分時間をかけ、創意あふれる授業ができる条件を整備することこそ子どもたちに確かな学力を保障する道と考えるが、所見を伺う。(教育長)

### 2. 島根原発周辺の災害対策について

- ① 宍道断層が動いた際の建物被害、経済被害の被害想定を伺う。(部長)
- ② 宍道断層の真上ならびに近傍に存在する土砂災害危険箇所など災害危険箇所を伺う。(部長)
- ③ 島根原発敷地内の土砂災害危険箇所について万全なる対策を講じるべきと考えるが、所見を伺う。(部長)
- ④ 昨年7月、宍道断層の長さは25キロから39キロへと見直しがなされた。宍道断層が東に14キロ延長したことにより、98キロの鳥取沖の断層との離隔距離はわずか5キロとなった。両断層が連動すれば140キロの活断層となる。2016年に政府の地震調査研究推進本部は、島根県東部地域において、マグニチュード6.8以上の地震が今後30年以内に発生する確率は40%とする衝撃的な長期評価を公表した。また、昨年2月、政府の地震調査研究推進本部は、宍道断層をマグニチュード7級以上の大地震を起こす可能性がある主要活断層帯に指定した。最新の知見、活断層評価に基づいた被害想定を行うべきと考えるが、所見を伺う。(部長)
- ⑤ 専門家は、京都府北部から山陰地方にかけてひずみ集中帯が広範囲に存在していると指摘している。事実、2000年に鳥取県西部地震、2016年に鳥取県中部地震、今年4月に島根県西部地震が発生した。山陰地方は地震の活動期に入ったとの専門家の警告をどう認識しているのか伺う。あわせて、地震に備えた災害対策・防災対策を強化すべきと考えるが、所見を伺う。(部長)

### 3. 松江北道路建設について

- ① 松江北道路建設ルートには宍道断層が走り、土砂災害危険箇所も多数存在するなど、危険極まりない地域である。活断層評価、河川堤防、ため池や土砂崩れなど災害危険箇所を調査するなど防災アセスメントを実施すべきと考える。住民の理解と合意なきまま性急なる都市計画手続きに入るべきではないと考えるが、所見を伺う。(部長)
- ② 2016年4月に発生した熊本地震において、活断層沿いは震度7相当の揺れに見舞われ、断層から約1キロ以内は建物が壊滅的な被害を受ける「震災の帯」ができた。この教訓に照らせば、活断層近傍に新規道路を建設すべきではないと考えるが、如何か。(知事)